

地域経済を支える図書館の農業支援サービス

藤井慶子（元・東久留米市立中央図書館）

1. はじめに

2003年に内閣府経済財政諮問会議が打ち出した「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2003（いわゆる骨太の方針）」は、雇用機会の創出のために「ビジネス支援図書館の整備」の必要性を説いている⁽¹⁾。そのことを具体的に示しているのが2005年に文部科学省が公表した「地域の情報ハブとしての図書館－課題解決型の図書館を目指して－」であり、それによれば、「公共図書館として支援可能な地域の経済社会の活性化につながるあらゆる取組」がビジネス支援ということになる⁽²⁾。しかし、日本の公共図書館は果たして「地域の経済社会の活性化」に寄与できるようなサービスを行っているだろうか。アメリカでは、市民⁽³⁾が情報の受容のみならず、自らの課題を解決し目的を達成するためのツールとして図書館を利用しており、ビジネスを専門とする優秀な司書もいるという⁽⁴⁾。日本では、ビジネス書や就職・転職など就労に必要な書籍や情報を集めて「ビジネス支援をした」と満足している図書館が多く、資料のその先の「支援」に踏み込めていないと感じる。

筆者はかつて東久留米市立図書館において、「ひとハコ図書館」という交流型展示を目玉とした「図書館フェス」プロジェクト⁽⁵⁾にスタッフとして関わっていた。地域で起業した出版社代表、ルポライター、陶芸家、古書店主、新刊書店店長、市内の技術研究所など、さまざまな立場で「地域でお金を稼ぐ」「お金を回す」人々に出会えたことは得難い体験であり、地域で働く人たちや「まちの経済」について考えるきっかけにもなった。「図書館フェス」は、図書館と多様な人が協力・協働して初めて成り立つ事業であるが、「協働」とは互いに利益を分かち合っていくものである。「地域経済を支える図書館」として、次に何ができるのか。本稿では、筆者がビジネス・ライブラリアン講習会を受講して受けたインスピレーションやアイデアを、実現可能なものとして提案していきたい。

2. 「ひとハコ図書館」発展型としての「直売所ライブラリー」

「ひとハコ図書館」は、磯井純充氏が提唱し、全国に広がりを見せている小さな私設図書館「まちライブラリー（マイクロ・ライブラリー）」⁽⁶⁾に着想のヒントを得ている。同様の取り組みを公共図書館が行った「公共図書館連携型」の先行事例としては、長野県小布施町立図書館の「おぶせまちじゅう図書館」、北海道恵庭市立図書館の「恵庭まちじゅう図書館」がある⁽⁷⁾。いずれの事例も、図書館がまちの産業を支える店舗を訪問して「営業」を行い、協力店を増やしていき、まちを一つの図書館と見立てて各協力店舗に管理を委ねたことにより、まちの中に人の流れと交流を生むことに成功している。

東久留米市立図書館「ひとハコ図書館」事業において、展示を見た来場者からの声で一番多かったのは「自分も、ひとハコ図書館を作りたい」という要望であった。筆者は、そ

これらの市民の声から、この取り組みを展開させていけば、地域の経済を図書館が何らかの形で支えることができるのではないかと考えるようになった。その一方で、「ひとハコ図書館」を小布施町や恵庭市のように商店の店先・店内で展開するのは難しいとも感じていた。商店の活性化事業としては、市内のNPO 法人が行っている「まちゼミ」⁽⁸⁾や、市商工会主催の「まちバル」⁽⁹⁾などが既に実施されていたことと、「ひとハコ図書館」をまちの中に展開させるには、市民も認める「東久留米らしさ」がなくてはならないということが念頭にあったからである。「東久留米らしさ」とは何かを考えていたとき、市内の至る所で見かける農産物の直売所が頭に浮かんだ。当時、館内で開催中だった展示「東久留米の農業」に寄せられた来場者アンケートの回答も思い出された。「東久留米といえば、やはり農業ですね」という市民からの声。そうだ、あの直売所に、ポストの様な小さな巣箱図書館が設置されていたら、どうだろうか。直売所は地域の経済が動く場であり、人々が集う＝交流する場でもある。そこで、直売所での「まちライブラリー」構想（以下、「直売所ライブラリー」）を本講習会における事前課題の企画として提案した。市内には 84 の直売所があること、それらは農家の生産物販売先としては全体の 55.2%を占め「最多」であり、今後も 43.3%の農家が「重点販売先」として希望していること、また、9 割の市民が「地場農産物」を食しているというアンケート調査の結果⁽¹⁰⁾から、「にぎわい」「交流」の拠点となる「地域の経済を支える図書館」としての可能性を提示した。

3. それは図書館の仕事か

ビジネス・ライブラリアン講習会の講義では、複数の講師から「ビジネス支援を行う過程で、”なぜ図書館がそこまでやるのか”と問われた」というエピソードが紹介された。このことは、図書館が「本」以外のこと、すなわち課題解決としての「ビジネス」や「まちづくり」に役に立つと思われていない現状を端的に示している。岩手県紫波町図書館の手塚美希氏は、「図書館はまちづくりのエンジン」と表現していた。紫波町における公民連携のまちづくりの一端を、「図書館が動かしている」という実感と自負のこもった言葉である。市民の「図書館は役に立たない」という思い込みを変え、図書館でサービスを受けたことが「感動」となる⁽¹¹⁾には、「味方」を作ることと、そのための戦略的な広報・PR を行うことが肝要である。それは図書館の「外」にいる市民に対してだけでなく、図書館が属する組織、いわば図書館の「中」でもある市政を執り行う行政に対しても同様で、実は「外」以上にしっかりと練られた作戦が必要ともいえる。

本講習会において、ワークショップのグループ課題に「直売所ライブラリー」が選ばれ、チームとして企画立案することになった。事業を行う根拠として、平成 29 年度から平成 31 年度の間で実施予定となっている市の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」⁽¹²⁾を取り上げ、産業政策課や健康課で既に行われている類似事業との統合もねらいのひとつとした。筆者の原案では、「直売所の活性化」と「新たな農業振興」の二点が事業の目的であったが、「事

業統合を提案することにより説得力と実現可能性が増す」というグループメンバーの提言により、そのことも含めて最終案をまとめた。どうしても、事業内容そのものを充実させたいという思考に囚われてしまいがちだが、新規事業を提案するだけでなく、同時に既存の事業を整理できる可能性も提示することで、説得力が強まったと思う。また、「目的」を明示することで「実際にすべきこと」が明確になるということも学んだ。

4. まちの未来を見つめる力をもつ

本講習会の講師の一人、安藤晴彦氏の講義で紹介された「自治体の経済元気度」は、受講生にとって特に強い印象を与えたと思われる。少なくとも筆者は大きな衝撃を受けた。「自治体の経済元気度」は、講師自らが「平成 18 年事業所・企業統計調査」⁽¹³⁾および「平成 26 年経済センサス - 基礎調査」⁽¹⁴⁾から受講生の所属図書館のある自治体のデータを抽出・編集し、「事業所増減率」「従業者数増減率」「女性従業者増減率」ごとにランキングしたものである。それによれば、東久留米市は従業者数の増減率はいずれも最下位に近く、失業率が高いように見える一方、事業所増加率においては全国で 11 位という結果が出ていた。つまり、起業する人が多いがそれは雇用に結びつくようなものではない、ということである。このように、統計データを「編集」してみせることで状況が浮き彫りにされ、改善策や今後の方針を考察する一助となることや、新たな発想の種にもなるのだと実感した。図書館は、このようなインターネット上にある各種の信頼できるデータの所在を知り、市民がそれらを自分たちで有効な形に「編集」できるように準備をしておく必要がある。同時に、与えられた玉石混交の情報を享受・消費することに慣れてしまった人々に、適切な情報を自ら取捨選択し、活用・応用する力をつけられるよう支援すること、そのことも図書館の重要な役割である。

図書館における「ビジネス支援」は、「目の前の人の困りごと」をより具体的に支援することが定石と思われてきたように思う。しかし、「潜在的利用者である市民や地域の困りごと」に対してはどうか。「直売所ライブラリー」は、本を通じての交流をビジネス支援にまで発展させ、図書館の機能を PR するというねらいも含んだ試案である。「図書館」と「本」の組み合わせによる事業は、いきなり「図書館のビジネス支援」というよりも、図書館と事業とのつながりを理解してもらえらるだろう。直売所における購入層に対しては、そこにある本を手にとることで、自らの課題や、その一步手前の困りごとに対する気付きが生まれ、解決への一手として図書館へ足を運ぶ、ということも期待される。一方で、場の提供者である農業従事者にとってのメリット＝「新たな顧客の創出」や、「野菜がないときにも人が集まる」ことに対する付加価値という点に関しては、企画段階でも事業における課題と感じた。農業従事者にとっても事業の意義を認めてもらえるような、農業の発展に貢献できる付加価値、たとえば、個人では契約の難しい専門的商用データベースの導入や、有用な図書館資料の紹介など、農業に特化して図書館機能の PR をしていきたいところである。

図書館から外に飛び出して活動してみると、多くの場面で「図書館への期待感のなさ」を実感する。また、公的機関として一定の信頼はあるが、「どうせ大したことない」という思い込みのために未利用となっている市民も多いと感じる。市内のあちこちにある直売所が、本を通じて「開かれた」場となり、人と人が交流することで困りごとが解決したり、図書館に馴染みのない人にも図書館を知ってもらえるきっかけとなって欲しい。もしかしたら「馴染みのない人たち」こそが、図書館の支援を必要としているかもしれないのだ。

地域の、まちのメインストリームは市民であり、公（行政）はサブで、民（市民）はパートナー。岩手県紫波町の「オガールプロジェクト」の実践は、そんな公民のチームワークにおけるまちづくりのひとつの成功例といえる。ビジネス支援を農業で実現するというチャレンジは、目新しいものとしてメディアにも多く取り上げられているが、実際には足掛け7年もの間練られてきたプロジェクトの一部であり、「何のために？まちのために。ではどうする？」という問いと、そのことに対するトライが繰り返された努力の結晶である。どのまちでも、その問いとトライを繰り返してもらいたい。

5. 終わりに

鳥根県海士町中央図書館の磯谷奈緒子氏は「図書館は町のインフラ」⁽¹³⁾といい、鳥取県立図書館の小林隆志氏は「社会のセーフティネットのひとつ」⁽¹⁶⁾と定義した。いずれも、重要であるのに認識されにくい図書館の機能をよく言い表している。情報を取り扱う図書館は間違いなく「知のインフラ」である。紙媒体だけでなく電子的なデータや、インターネット上にあふれている情報も取り扱わなければならない。地域から多様な情報を収集・整理・保存するだけでなく、使いやすいように編集・加工することもこれからの図書館には求められる。社会を活性化させるには、まず地域の経済を元気にしなくてはならない。そのために図書館ができることはたくさんあるし、可能性は広がっている。その可能性をどこまでも広げるために図書館司書はいる。市民から公的機関として信頼され、先人が代々培ってきた知識や文化を次世代に引き継ぐ図書館は、ビジネスの世界でも十分に「役に立つ」存在になり得る。言い方を変え、やり方を変え、今後も取り組んでいきたいと思う。

《注》

(1)内閣府経済財政諮問会議，経済財政運営と構造改革に関する基本方針 2003，2003.6.

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizai/kakugi/030627f.html> (2017年8月27日確認)

(2)文部科学省，地域の情報ハブとしての図書館－課題解決型の図書館を目指して－，2005.1.

http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/05091401.htm (2017年8月27日確認)

(3)本稿では、「地域に暮らし生活する人々のこと」を「市民」と表現している。

(4)菅谷, 2003, pp.16-17.

(5)藤井, 2015

(6)磯井, 2014, p.192

(7)内藤, 2016, pp.27-28

(8)久留米まちゼミ

<http://machizemi.kurume-machigenki.net/> (2017年8月27日確認)

(9)「広報ひがしくるめ」2016年10月1日号, p.5

http://www.city.higashikurume.lg.jp/res/projects/default_project/page/001/005/396/271001-pdf/27100104.05.pdf (2017年8月27日確認)

(10)「東久留米市農業振興計画策定に関するアンケート調査結果報告書」平成28年3月

(11)豊田, 2007, pp.34-38

(12)「まち・ひと・しごと創生総合戦略」東久留米市

http://www.city.higashikurume.lg.jp/res/projects/default_project/page/001/005/229/28.07.21sougousenryaku.pdf (2017年8月27日確認)

(13)「平成18年事業所・企業統計調査」総務省統計局

<http://www.stat.go.jp/data/jigyoku/2006/> (2017年8月27日確認)

(14)「平成26年経済センサス - 基礎調査」総務省統計局

<http://www.stat.go.jp/data/e-census/2014/index.htm> (2017年8月27日確認)

(15)磯谷, 2016, p.48

(16)小林, 2016, p.82

《参考文献》

・菅谷明子『未来をつくる図書館—ニューヨークからの報告』岩波書店, 2003年

・竹内比呂也, 豊田高広, 平野雅彦『図書館はまちの真ん中—静岡市立御幸町図書館の挑戦』勁草書房, 2007年

・磯井純充『マイクロ・ライブラリー図鑑—全国に広がる個人図書館の活動と514のスポット一覧』まちライブラリー, 2014年

・藤井慶子, 「ひとハコ図書館」からはじめる新しい図書館, 『カレントアウェアネス-E』No.286, 2015年8月6日(<http://current.ndl.go.jp/e1696> 2017年8月27日確認)

・内藤和代, 市民とともにめざす「読書のまち 恵庭」(青柳英治/編, 岡本真/監修『ささえあう図書館—「社会装置」としての新たなモデルと役割』勉誠出版, 2016年)

・磯谷奈緒子, 離島の小さな図書館にできること—海士町中央図書館の歩み(青柳英治/編, 岡本真/監修『ささえあう図書館—「社会装置」としての新たなモデルと役割』勉誠出版, 2016年)

・小林隆志, 図書館は社会のセーフティネットになっているか?—「課題解決」型の図書

館の視点から（青柳英治／編，岡本真／監修『ささえあう図書館—「社会装置」としての新たなモデルと役割』 勉誠出版，2016年）

- ・ 神代浩『困った時には図書館へ—図書館海援隊の挑戦』 悠光堂，2014年
- ・ 猪谷千香『町の未来をこの手でつくる』 幻冬舎，2016年
- ・ 『東久留米市農業振興計画』 東久留米市市民部産業政策課，2016年